

## 江戸時代における筑波山とその参詣者 —道標から見る—

崎山 百合子

江戸時代、太平の世のなかで庶民をとりまく環境は大きく変わった。生活に余裕ができ経済的に豊かになったことはもちろん、道や旅行施設の整備が進んだこと、領主の許可なく旅を行えない身分の者でも巡礼の旅なら許可を得やすかったことなどから、中期以降には庶民に参詣の旅が流行した。各地で寺社の観光地化が進むなか、筑波山でも茨城県内や江戸から多くの人を訪れたことが予想されるがその実態はいまだ解明されていない。そこで、筑波山の観光地化の過程を知る一つの手段として、江戸時代に造立された「つくば」を示す道標を調査し筑波山を訪れた人々はどこから、どのような経路で訪れたのかを明らかにしたい。

実際に道標が設置されている地区を見てみると、筑波山周辺に多く集中していること、並び方が一列で規則性があることが分かった。さらに、栃木県にもつくばを示す道標があることが判明した。道標の種類は単体道標、月待・日待塔、馬頭観音、供養塔、庚申塔の順に多かった。造立時期を見てみると1700年から江戸時代の終わりにかけてもっとも多く造立されている。この時期筑波山では社の修繕費を工面するため勧化や開帳を行ったとされ、世間の参詣ブームともあいまって訪れた大勢の参詣者のために道標が必要となり、多く設置されたのではないかと推察される。

江戸時代の筑波山には、府中街道、六所神社を経て女体祠にいたる道、筑波山街道、つくば道の4つの参詣道があったとされる。そのうち江戸時代に最も栄えたのは北条からひかれたつくば道である。常陸国内を通る瀬戸井道はこのつくば道とつながっていた。また、下野国からつくばに至るには水戸街道、茂木街道、水戸北街道、下館街道と呼ばれる道が主要な道であったとされている。地図上でつくばを示す道標の分布とこれらの道筋を重ねてみると、ほとんどに一致がみられ、道標の多くは主要な参詣道、街道沿いに建てられているといえる。しかし主要な道沿い以外にも道標は建てられており、今ではあまり知られていないが、かつて人々がつくばを目指す際によく利用していた道がいくつかあったのではないかと推察される。実際、これまでの筑波山に関する研究では下野国とのかかわりについて触れられていなかったが、真岡市や野木町、益子町などで筑波山信仰といってよい風習がみられた。筑波山はその優美な姿をもって従来考えられていた常陸国や江戸だけではなく、下野国も含む北関東からの参詣客を集めたといえる。今回の調査では道標を対象に陸上交通のみ取り扱ったが近世の関東では鬼怒川や利根川などの河川も人や物資の運搬において重要な役割を果たしていた。今後水上交通も対象とした調査の必要があると考える。

(指導教員 白井哲哉)